

妙法蓮華經。勸持品。第十三

爾の時に藥王菩薩摩訶薩及び大樂說菩薩摩訶薩、二萬の菩薩眷屬と俱に、皆佛前に於て是の誓言を作さく、

唯願わくは世尊、以て慮いたもうべからず。我等佛の滅後に於て當に此の經典を奉持し讀誦し説きたてまつるべし。後の惡世の衆生は善根轉た少くして増上慢多く、利供養を貧り、不善根を増し、解脱を遠離せん。教化すべきこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して、此の經を讀誦し持説し書寫し、種種に供養して身命を惜まざるべし。

爾の時に衆中の五百の阿羅漢受記を得たる者、佛に白して言さく、

世尊、我等亦自ら誓願すらく、異の國土に於て廣く此の經を説かん。

復學・無學八千人の受記を得たる者あり。座より而も起つて合掌し佛に向いたてまつりて、是の誓言を作さく、

世尊、我等亦當に他の國土に於て廣く此の經を説くべし。所以は何ん、是の娑婆國の中は人弊惡多く、増上慢を懷き功德淺薄に、瞋濁諂曲にして心不實なるが故に。

爾の時に佛の姨母摩訶波闍波提比丘尼、學・無學の比丘尼六千人と俱に、座より而も起つて一心に合掌し、尊顔を瞻仰して目暫くも捨てず。時に世尊、憍曇彌に告げたまわく、

何が故ぞ憂の色にして如來を視る。汝が心に將に我汝が名を説いて阿耨多羅三藐三菩提の記を授けずと謂うこと無し耶。

憍曇彌、我先に總じて一切の聲聞に皆已に授記すと説きき。今汝記を知らんと欲せば、將來の世に當に六萬八千億の諸佛の法の中に於て大法師と爲るべし。及び六千の學・無學の比丘尼も俱

に法師と爲らん。汝是の如く漸漸に菩薩の道を具して、當に作佛することを得べし。一切衆生喜見如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號けん。憍曇彌、是の一切衆生喜見佛及び六千の菩薩、轉次に授記して阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

爾の時に羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、是の念を作さく、世尊、授記の中に於て獨我が名を説きたまわす。

佛、耶輸陀羅に告げたまわく、

汝來世百千萬億の諸佛の法の中に於て、菩薩の行を修し大法師と爲り漸く佛道を具して、善國の中に於て當に作佛することを得べし。具足千萬光相如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號けん。佛の壽、無量阿僧祇劫ならん。

爾の時に摩訶波闍提比丘尼及び耶輸陀羅比丘尼并に其の眷屬、皆大に歡喜し未曾有なることを得、即ち佛前に於て偈を説いて言さく、

世尊導師 天・人を安穩ならしめたもう

我等記を聞いて 心安く具足しぬ

諸の比丘尼、是の偈を説き已つて、佛に白して言さく、世尊、我等亦能く他方の國土に於て、廣く此の經を宣べん。

爾の時に世尊、八十萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩を視そなわす。是の諸の菩薩は皆是れ阿惟越致にして、不退の法輪を轉じ、諸の陀羅尼を得たり。即ち座より起つて佛前に至り一心

に合掌して、是の念を作さく、若し世尊、我等に此の經を持説せよと告敕したまわば、當に佛の教の如く廣く斯の法を宣ぶ

べし。復是の念を作さく、佛今默然として告敕せられず。我當

に云何がすべき。

時に諸の菩薩、佛意に恭順し并に自ら本願を滿ぜんと欲して、便ち佛前に於いて師子吼を作して、誓言を發さく、

世尊、我等如來の滅後に於て、十方世界に周旋往返して、能く衆生をして此の經を書寫し、受持し、讀誦し、其の義を解説し、法の如く修行し、正憶念せしめん、皆是れ佛の威力ならん。唯願わくは世尊、他方に在すとも遙かに守護せられよ。

即時に諸の菩薩俱に同じく聲を發して、偈を説いて言さく。

唯願わくは慮いしたもうべからず 佛の滅度の後

恐怖惡世の中に於て 我等當に廣く説くべし

諸の無智の人 惡口罵詈等し

及び刀杖を加うる者あらん 我等皆當に忍ぶべし

惡世の中の比丘は 邪智にして心諂曲に

未だ得ざるを爲れ得たりと謂い 我慢の心充滿せん

或は阿練若に 納衣にして空閑に在つて

自ら眞の道を行はずと謂うて 人間を輕賤する者あらん

利養に貪著するが故に 白衣のために法を説いて

世に恭敬せらるること 六通の羅漢の如くならん

是の人惡心を懷き 常に世俗の事を念い

名を阿練若に假つて 好んで我等が過を出さん

而も是の如き言を作さん 此の諸の比丘等は

利養を貧るを爲ての故に 外道の論議を説く

自ら此の經典を作つて 世間の人を誑惑す

名聞を求むるを爲ての故に 分別して是の經を説くと

常に大衆の中に在つて 我等を毀らんと欲するが故に

國王・大臣 婆羅門・居士

及び餘の比丘衆に向つて 誹謗して我が惡を説いて

是れ邪見の人 外道の論議を説くと謂わん

われらほとけ うやま 我等佛を敬うが故に 悉く是の諸悪を忍ばん
こ 斯れに輕しめて汝等は 皆是れ佛なりと言われん
かく 此の如き輕慢の言を 皆當に忍んで之を受くべし
じよつこうあくせ なか 濁劫惡世の中には 多くの諸の恐怖あらん
あつきそ み 惡鬼其の身に入つて 我を罵詈毀辱せん
われらほとけ きようしん 我等佛を敬信して 當に忍辱の鎧を著るべし
こ きよう と 是の經を説かんが爲の故に 此の諸の難事を忍ばん
われしんみよう あい 我身命を愛せず 但無上道を惜む
われららいせ おい 我等來世に於て 佛の所囑を護持せん
せそんみずか まさ しろ 世尊自ら當に知しめすべし 濁世の惡比丘は
ほとけ ほうべん 佛の方便 隨宜所説の法を知らず
あつく ひんじゆく 惡口して顰蹙し 數數擯出せられ
とうじ おんり 塔寺を遠離せん 是の如き等の衆惡をも
ほとけ てうちよく 佛の告敕を念うが故に 皆當に是の事を忍ぶべし
もろもろ じゆらく 城邑に 其れ法を求むる者あらば
われみなそ ところ 我皆其の所に到つて 佛の所囑の法を説かん
われ こ 我は是れ世尊の使なり 衆に處するに畏るる所なし
われまさ よ 法を説くべし 願わくは佛安穩に住したまえ
われせそん みまえ 我世尊の前 諸の來りたまえる十方の佛に於て
かく 是の如き誓言を發す 佛自ら我が心を知しめせ